

3 聖地 津軽へ

作者：文京区在住 60代女性役員

作品の概要	<p>今年4月、夫婦で3泊4日の津軽の旅を挙げる。作者は初の津軽。満開の桜に舞い落ちる雪に感激し、津軽の人と接し、津軽の食を味わいながら、太宰の『津軽』執筆の旅とは逆に巡る「津軽の旅」を満喫する。</p> <p>初日、車で弘前へ、雪の弘前公園で夜桜見物。2日目、五所川原に車をおき五能線で深浦へ、帰路は「リゾートしらかみ」で千畳敷の太宰文学碑を見た後五所川原、車に乗り換え金木・斜陽館、芦野公園へ。3日目、十三湖、小泊・小説「津軽」の像記念館、龍飛・青函トンネル記念館へ。4日目、三厩・義経寺、蟹田・観瀾山、青森という旅程。</p> <p>作者は、中学2年頃に『女生徒』を読んで以来、太宰作品の虜。出産・育児等のときを経て、再び読み始め、三鷹・甲府と太宰の足跡を追うことも。</p> <p>今回、初の津軽行は夫からの提案で実現、車で東京を発つが途中からは雪、しかし、弘前公園の雪と桜の光景に感動、居酒屋の女将の津軽弁と郷土料理にも感激。</p> <p>太宰と同じ五能線に乗り、車窓から日本海を見る自分に太宰を重ね、斜陽館では太宰の悲しみを感じる。</p> <p>小泊・小説「津軽」の像の太宰とタケは、作者が想像していた再会の場面にぴったり、生の『津軽』に接する。</p> <p>蟹田では、蟹を求めて海辺の番屋を訪ね、とげくり蟹、ほたて、漬物、コーヒーと津軽人の「疾風怒濤」の接待を受け、観瀾山の文学碑では太宰を思い涙した。</p> <p>旅の終わり青森では、多感な少年期の太宰に思いを馳せながら、旅の思い出を乗せた車は帰路につく。これほど心に沁みる旅は今までなかった。</p>
選考理由	<p>ひきしまった文章で、旅の様子や気持ちがよく伝わってくる。</p> <p>五能線・青森市の描写がよい。</p> <p>心地よいテンポで、津軽各地と小説『津軽』の魅力を表現。エピソードもおもしろい。</p> <p>旅行前から宿泊場所にこだわり、インターネットで検索する様子など、津軽の旅に期待する思いが伝わってくる。</p> <p>地元の人たちとの暖かい触れ合いが紹介され、ほのぼのとした読後感が残る。</p>